

福井県埋蔵文化財調査報告 第159集

# 小 尉 遺 跡

— 一般国道416号（白方～布施田バイパス）道路改良工事に伴う調査 —

2 0 1 6

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

## 序 文

本書は、一般国道416号白方～布施田バイパス道路改良工事に伴い、平成24年度に実施した小尉遺跡発掘調査の成果をまとめた報告書です。

小尉遺跡は福井市小尉町・黒丸城町・三宅町にかけて広がる水田地帯に立地する遺跡で、今回の調査では弥生時代後期の集落跡を確認できました。

遺跡は近年の土地開発によって削平を受けていましたが、大規模な平地住居や、集落内の境界を示す区画溝などを良好な状態で検出しました。遺物は火を受けて炭化・劣化した土器が主で、遺構の覆土にも多くの焼土や炭が含まれていたことから、集落が火災に遭った様子がうかがえます。また、玉作り関連遺物も検出しており、本遺跡でも玉作りを営んでいたことが明らかになりました。

本遺跡が展開する九頭竜川下流左岸の三角州平野は、水害の危険性が高い地勢です。そんな場所にも積極的に進出して定住生活を営んでいたことは、当時の人々の活発な生業活動の実態を示すものと言えます。

今後、本書の調査成果が広く公開・活用され、埋蔵文化財に対するご理解と、郷土の歴史に対する興味をより一層深める端緒となれば、誠に幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、関係諸機関や地元の方々をはじめとする多くの皆様方から、あたたかいご支援とご協力を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。

平成28年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター  
所 長 工 藤 俊 樹

## 例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが、一般国道416号（白方～布施田バイパス）道路改良工事に伴い、平成24年度に実施した小尉遺跡（福井県福井市黒丸城町所在）の発掘調査報告書である。
- 2 小尉遺跡の調査は、福井土木事務所の依頼を受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、中森敏晴、北川遼、藤原嘉弘が担当した。
- 3 発掘調査は、平成24年5月1日から平成24年8月31日まで実施した。出土遺物の整理作業は、平成25年4月1日から平成28年3月22日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集・作成は中森が担当し、赤澤徳明が第4章第1節を、他を中森が執筆した。
- 5 小尉遺跡に関する成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 6 挿図および表の作成は担当者がおこない、吉田桂子と望月麻佑がこれを補佐した。遺構・遺物写真撮影および図版作成は中森が担当した。
- 7 本書の調査区全体図は、福井土木事務所から基本測量を中央測量設計株式会社、航空測量を株式会社日新企画設計に委託して作成した。写真図版に使用した上空写真は航空測量時に撮影したものである。
- 8 写真図版・挿図・表の遺物番号は符合する。写真の縮尺は不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は海拔高（m）を示し、方位は座標北を用いた。X・Y座標値は国土方眼座標系第VI系（世界測地系）に基づく。
- 10 第1～3図の作成にあたっては、国土地理院5万分1地形図「福井」（平成16年5月1日発行）、同2万5千分1地形図「越前森田」（平成20年12月1日発行）、同2万5千分1土地条件図「福井」（平成16年5月1日発行）を一部改変して使用した。
- 11 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 12 発掘調査に際しては、下記の機関・団体から協力を得た。  
福井市鶴公民館、福井市黒丸城町・葛蒲谷町・波寄町・水切町各自治会（順不同・敬称略）
- 13 発掘調査には地元の方々の参加・協力を得た。また、遺物整理作業は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

## 目 次

第1章 調査の経緯 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査の経過 .....	2
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境 .....	3
第1節 地理的環境 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	4
第3章 遺構 .....	7
第1節 遺跡の概要 .....	7
第2節 遺構 .....	7
第4章 遺物 .....	16
第1節 土器 .....	16
第2節 石器・石製品・玉作り関連遺物 .....	25
第5章 まとめ .....	28

## 写真図版目次

図版第1	遺跡 (1) 調査区遠景(北西より) (2) 調査区遠景(南西より)
図版第2	遺跡・遺構 (1) 調査区全景(北西より) (2) 住居1、溝1・3(西より)
図版第3	遺構 (1) 溝5(南東より) (2) 井戸1(北より) (3) 土坑7(北より)
図版第4	遺物(土器) 住居1出土土器
図版第5	遺物(土器) 井戸1、土坑1・2・6、溝1・4・5、遺構外出土土器
図版第6	遺物(石器・石製品・玉作り関連遺物)
	(1) 石器・石製品 (2) 管玉未成品(形割段階) (3) 管玉未成品(角柱段階)
	(4) 管玉未成品(穿孔段階) (5) 管玉 (6) 不明品

## 挿 図 目 次

第1図	小尉遺跡調査区位置図	1
第2図	小尉遺跡周辺地形図	3
第3図	小尉遺跡と周辺の遺跡分布図	5
第4図	調査区全体図	9・10
第5図	住居1実測図(1)	11
第6図	住居1実測図(2)	12
第7図	井戸1、土坑1・3・6・7実測図	13
第8図	溝1・3実測図	14
第9図	溝5実測図	15
第10図	土器実測図(1)	17
第11図	土器実測図(2)	18
第12図	土器実測図(3)	19
第13図	土器実測図(4)	21
第14図	土器実測図(5)	22
第15図	石器・石製品・玉作り関連遺物実測図	26

## 表 目 次

第1表	土器観察表	23
第2表	石器・石製品計測表	27
第3表	玉作り関連遺物計測表	27

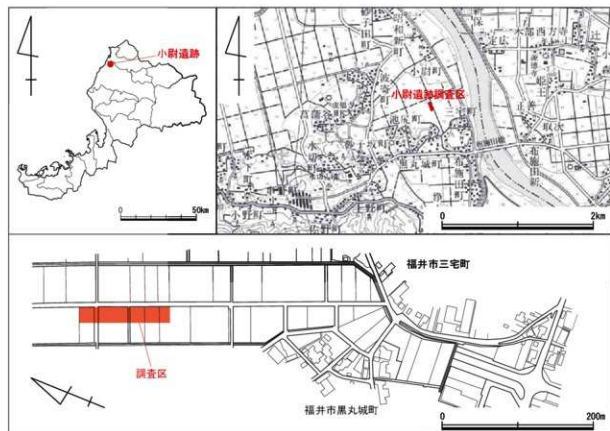
## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯（図版第1、第1図）

平成18年（2006）、福井県福井市を起点として石川県小松市に至る延長約91kmの幹線道路である一般国道416号において、「白方ー布施田バイパス」改良工事業が採択された。この事業は、北陸自動車道福井北インターチェンジから福井市街地を経て、福井港・テクノポート福井へ至るアクセス道路として、福井市白方町から同市布施田町に至る延長5.2kmの4車線（暫定2車線）バイパス道路を整備し、現道の線形不良・幅員狭小区間の改善による交通混雑解消・交通事故緩和を図ると同時に、地域産業の活性化と観光振興への寄与を目的とするものである。

この事業採択以降、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文）は福井土木事務所の依頼を受け、事業に伴う工事の実施によって影響を受けるおそれのある複数の遺跡について、事後の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議資料を得ることを目的とする試掘調査等を随時実施した。このうち、福井市小尉町・黒丸城町・三宅町にかけて展開する小尉遺跡についても、平成23年（2011）に依頼（平成23年12月5日付け福土第2182号）を受けて試掘調査を実施した結果、弥生時代後期に属する遺構・遺物を確認し、黒丸城町地籍の総面積2,520㎡（工事掘削幅21m×延長120m）について、本格調査が必要となる旨を回答した（平成23年12月20日付け埋文第3-45号）。

この回答を受けて、福井土木事務所は福井県教育庁文化課（現、生涯学習・文化財課）に本格調査を依頼し、県埋文も交えた協議の結果、平成24年度に調査対応することで合意し、調査計画が確定した。



第1図 小尉遺跡調査区位置図（上左：縮尺1/2,500,000、上右：縮尺1/50,000、下：縮尺1/5,000）

## 第2節 調査の経過

調査は平成24年(2012)5月1日より開始し、同年8月31日に終了した。調査区の総面積は2,520㎡(東西21m×南北120m)を測る。調査区には一辺10mの方形グリッドを設定し、北から南に向かってA～M、東から西に向かって1～3の記号をそれぞれ付してグリッド名とした。

以下、調査日誌を抄録する。

5月14日	現場作業開始。調査区周縁に排水溝掘削。	7月19日	現場作業と併行して、住居1周溝およびビット覆土洗浄開始。
5月18日	調査区の農道側法面を土のうで押さえて補強。	7月24日	C2区、住居1周溝内土器出土状況実測。
5月21日	排水溝掘削完了。	7月25日	住居1周溝およびビット覆土洗浄終了。
5月22日	調査区南方より遺構精査、掘削開始。	8月1日	E3区、井戸1検出。
6月4日	調査区全体の遺構分布状況を先行して把握するため、南北方向に幅3m・深さ5cm程度の長大なトレンチ2列を設定、掘削開始。	8月2日	井戸1完掘。
6月11日	B2区で、溝1検出。	8月3日	調査区南方よりベルトコンベアを撤去しつつ、コンベア直下部の遺構精査・掘削開始。
6月12日	溝1覆土から緑色凝灰岩破片数点出土。	8月6日	調査区周辺の草刈。併行してベルトコンベア直下部の住居1周溝および溝5の残部を掘削開始。
6月13日	B・C2・3区、不明石製品1点出土。	8月7日	溝5完掘。住居1中央部にビット数基検出。ベルトコンベアを空撮時の清掃のみ確保し、残りは撤去。
6月14日	B・C区トレンチ拡張、全面掘削。	8月8日	住居1周溝ほぼ完掘。B3区、土坑7検出。井戸1写真撮影。
6月18日	B・C2区で、弧を描く周溝検出。	8月9日	溝5写真撮影。
6月21日	B～D区で、弧を描く周溝の区画内にビット多数視認。平地住居と推測する。	8月10日	19日まで盆休み。セクション図等実測後、不要器材撤収。
6月25日	B～D区で、大小不定形の溝が複数連続し、直径18m前後の楕円弧を描く周溝を検出。住居1とする。周溝覆土は多量の炭・焼土粒や被熱土器片を含み、火災住居と推測する。	8月20・21日	空撮前清掃。セクション・平面図ポイントを測量後回収。
6月26日	住居1周溝および区画内ビット覆土から緑色凝灰岩破片多数検出。覆土を土のう袋に取り置く。	8月22日	航空写真測量を実施。午後より土坑7写真撮影。
6月28日	藤原囀託、現場を離脱。	8月23日	高所作業車で調査区全景(北・南より)、住居1、区画溝など写真撮影。
7月2日	北川囀託、現場に合流。溝1が住居1周溝に交錯することを確認する。	8月28日	後片付け。土のうや測量枕を撤去、ブルーシートや発掘道具等を洗浄。
7月4日	C2区、住居1周溝内からミニチュア土器1点出土。	8月29日	公用車で発掘道具等撤収。
7月9日	E2区、土坑6から土器一括出土。	8月30日	事務所等プレハブおよびリース器材撤収開始。
7月10日	住居1周溝掘削、全体の9割強終了。本日より現地に休憩用テントを設置。	8月31日	撤収完了。現地調査終了。
7月13日	溝5検出。集落の区画溝と推測する。		

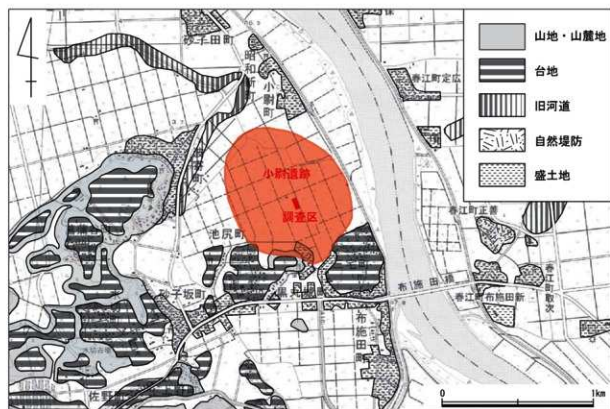
## 第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境 (図版第1、第2図)

福井県は古代の越前・若狭両国から構成され、本州日本海沿岸のほぼ中央近く、本州が西から次第に北東へ折れ曲がる付近に位置する。現在では敦賀市の東方、木ノ芽山嶺を境に以北を嶺北、以南を嶺南と呼び、行政的にも大別される。嶺北地方は越前国から現在の敦賀市を除いた範囲にほぼ相当し、嶺南地方は古代の若狭国に現在の敦賀市を合わせた範囲に相当する。

福井市は嶺北地方中部に位置し、北は坂井市・吉田郡永平寺町、北東は勝山市、東は大野市、南は鯖江市・丹生郡越前町・今立郡池田町に接し、北西は日本海に面する。福井市街の中心は足羽川右岸の沖積地にあり、足羽川は市街地を南東から北西へ貫流し、やがて市街地西部で日野川に合流する。日野川も足羽川との合流後ほどなく県内最大の河川である九頭竜川に合流するが、九頭竜川はここで流れを変えて北上し、日本海に注ぐ。九頭竜川と日野川の合流点より下流の左岸、すなわち川の西岸から日本海沿岸にかけての帯は川西地区と呼ばれ、小尉遺跡の位置する福井市小尉町・黒丸城町・三宅町はいずれもこの川西地区に属している。

川西地区は東辺を九頭竜川、西辺を日本海、南辺を丹生山地に囲まれた三角形を呈し、地区面積の7割ほどを山地が占める。集落は主に台地上の丘陵や山麓地のほか、沖積地に点在する盛土地などに形成される。小尉遺跡は九頭竜川左岸に接する低平・低湿な三角州平野上に立地するが、南方および西方を舌状にせり出した山地・山麓地形に塞がれ、さらに北側には旧河道が認められることから、かつては袋小路のような地勢を呈していたものと推測できる。



第2図 小尉遺跡周辺地形図 (縮尺1/25,000)



## 第2節 歴史的環境 (第3図)

本節では小尉遺跡周辺域の遺跡のうち、近年の調査事例を主に記す。

**波寄三宅田遺跡** (第3図3) 福井市波寄町に所在する。平成22・23年(2010・2011)に県埋文が発掘調査を実施、縄文～中世の各時期に属する遺構・遺物を確認した。主要な遺構として、弥生時代の方形周溝墓1基と土坑墓2基、平安時代の掘立柱建物18棟、弥生時代から中世の井戸20基、自然河川2条などを検出した。掘立柱建物はいずれも長軸を南北に揃え、東西にまとまって整然と配置される。井戸からは土器や木製品など豊富な遺物を得たが、特に7区の井戸SE3底部より完形の須恵器盤・杯・蓋が出土した。盤の外面底部には「五月女(さおとめ)」の墨書が認められ、井戸廃棄に伴う祭祀品と推測できる。また、調査区東端の自然河川1条は、上層に弥生時代中期～後期末および古墳時代前期の土器・木製品、下層に縄文時代後期～晩期の土器を多量に含み、県内でも希少な土偶も確認した。

**菖蒲谷遺跡** (第3図6) 福井市菖蒲谷町に所在する<sup>(1)</sup>。昭和54年(1979)、福井県教育委員会の分布調査により確認したが、土砂採取工事のため、大半が滅失した。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・玉作り関連遺物が出土したほか、崖面や切り通し断面に竪穴住居数棟を視認したとされる。

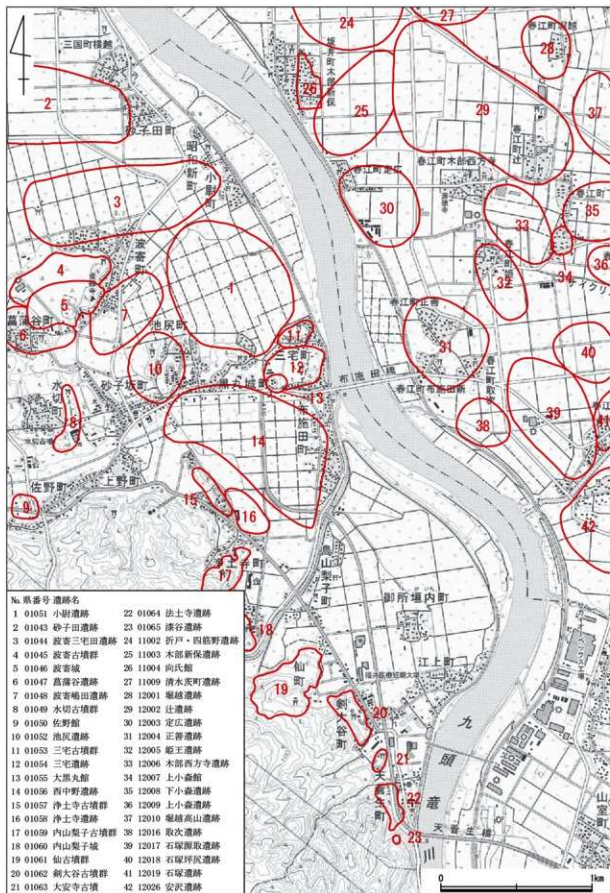
**水切古墳群** (第3図8) 福井市水切町に所在する。総数3基の古墳が存在し、1号墳は径25～26mの円墳と推定され、全長11.5mの両袖式横穴式石室を有する。2号墳は南北径15.1m、東西径12.6mを測り、残存長5.3mの右片袖式横穴式石室を有する。3号墳は墳丘が明確でないが、残存長2.8mの切石積み横穴式石室を有する。貞享三年(1686)の発掘記録が残り、同市砂子坂町の西徳寺がその出土遺物として、杯蓋1点・杯身4点・短頸壺1点・腕1点・高坏4点・平瓶2点・金環2点などを保管している。昭和57年(1982)、2号墳石室天井石の落下が懸念され、福井市教育委員会が天井石と墳丘の修復および内部の清掃を実施した。

**佐野館** (第3図9) 福井市佐野町に所在する。『越前国城蹟考』は朝倉氏家臣佐野氏の屋敷跡と記す。丹生山地北麓の東西に長く延びる砂丘地を利用した館跡で、南北両側の水田地帯との比高差約7～8mの自然の要害である。明治8年(1875)の地籍図には、東西約70m、南北約58mの土居の外側に、幅約9mの土塁がほぼ完全に認められる。さらに北方の台地際に沿って、重郭の土塁の一部が約220mも延びるとされるが、現状では確認できない。

**三宅古墳群** (第3図11) 福井市三宅町に所在する。昭和53年(1978)、福井県教育委員会の分布調査により、前方後円墳1基(1号墳)と円墳8基(2～9号墳)の計9基を確認した。群内で最大規模を有する1号墳は全長37.5m、後円部径22.5m、前方部長15.0m、後円部高4.0m、前方部高1.5mを測り、周溝を巡らす、葺石や埴輪は確認していない。前方後円墳を有することと、当地が水運の要地であることから、福井市北西部の有力集団の古墳群と目される。

**大黒丸館** (第3図13) 福井市三宅町に所在する。地籍名から「三宅黒丸城」とも呼ぶ<sup>(2)</sup>。昭和36年(1961)ごろの調査では、東辺と北辺の東半に幅5m・高さ2mの土塁と、その外側に幅4～7m・深さ1mほどの堀跡が残る、約70m四方の単濠郭式構造と推測される。

**剣大谷古墳群** (第3図20) 福井市剣大谷町・江上町に所在する。総数29基の墳墓が存在する。平成2年(1990)の土砂採取工事に伴い、2号墳が一部破壊されたのちに自然崩壊が進み、これに隣接する1号墳の崩壊も懸念されたため、平成4年(1992)に福井市教育委員会が発掘調査を実施した。1号墳は南北14.0m、東西12.7mの方形で、築造時期は弥生時代終末期～古墳時代前半と推測される。また、周辺から弥生時代後期に属すると見られる住居跡3棟と土坑2基を検出した。



第3図 小尉遺跡と周辺の遺跡分布図(縮尺1/25,000)

**法土寺遺跡** (第3図22) 福井市江上町字法土寺・字漆谷に所在する。平成6～11年(1994～1999)にかけて累埋文が発掘調査を実施し、弥生時代後期および古墳時代中～後期の墳墓・古墳群、中世の寺院跡などを確認した。墳墓・古墳は総数36基を数え、うち後期古墳19基のほとんどが横穴式石室を埋葬施設とする。また、中期古墳である22号墳には頭甲・肩甲が副葬され、群内で突出した内容を誇る。中世寺院は14世紀前後の創建と見られ、15世紀から16世紀にかけて地形の変更を伴う大規模な造成を経て、堀切や土塁を備えた城館的性格の強い寺院へと変貌を遂げたが、最終的には火災に遭って廃絶した、と推測される。

**漆谷遺跡** (第3図23) 福井市江上町字漆谷に所在する。平成5年(1993)に累埋文が発掘調査を実施し、古墳時代前期および6世紀中頃から7世紀前半の古墳群と、13世紀後半から14世紀後半以降の中・近世墓群を検出した。古墳は総数5基を検出し、1～4号墳は横穴式石室を有し、副葬品を伴う後期古墳である。特に1号墳からは馬具・装身具・工具類・須恵器など、質・量とも他を圧倒する豊富な副葬品が出土した。墓の規模や出土遺物の時期・内容、石室の形態などから、古墳群は1号墓を盟主墓とした支群であり、北部九州の影響を強く受けて造営されたと推測される。

**木部新保遺跡** (第3図25) 坂井市坂井町木部新保・辻に所在する。昭和23年(1948)、木部新保の個人宅地から仏教法具である鏡<sup>3)</sup>が出土したことで知られる。平成21年(2009)に累埋文が発掘調査を実施し、溝・掘立柱建物・土坑・ピットなどの遺構を確認した。出土遺物は弥生時代から中世までの時期幅を有するが、弥生土器が主である。

## 注

- 1 「福井県遺跡地図」以前の文献では、波寄古墳群・波寄城・葛蒲谷遺跡の範囲を合わせて「葛蒲谷遺跡群」と報告している。
- 2 「越前国城考」には一乗谷に移る以前の朝倉氏の居城と記すが、近年の研究では福井市黒丸町に所在する黒丸城跡(小黒丸城)との混同とされる。また、遺跡から五輪塔が出土していることから寺院跡との意見もあるが、定かではない。
- 3 銅製で、球形の鈴に柄をつけたもの。説経の際に鈴部を上にして振って音響を出す。平安密教以前のいわゆる雑密や神仏習合信仰に関連するものと考えられ、現存資料は全国でも十余例を数えるのみという貴重な遺物である。

## 参考文献

- 青木豊昭「三里浜周辺地域の遺跡について」『重要遺跡緊急確認調査報告(Ⅱ) 福井県埋蔵文化財調査報告第3集 福井県教育委員会 1979年
- 岩田武志「水切古墳群」『福井市史 資料編1 考古』福井市 1990年
- 小栗田淳 監修『福井県の地名』日本歴史地名体系第18巻 平凡社 1981年
- 河端太平『川西町史』1964年
- 河原純之・島田正彦・牟田嘉彦・松浦義則 責任編集『角川日本地名大辞典 18 福井県』角川書店 1989年
- 柳部正典・川越光洋 編『法土寺遺跡Ⅰ』福井県埋蔵文化財調査報告第49集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007年
- 坂靖志 編『剣大谷1号墳発掘調査報告書』福井市教育委員会 1993年
- 清水孝之「波寄三宅田遺跡」『年報26 平成22年度』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2012年
- 白川綾 編『大牧遺跡・木部新保遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第143集 同 2013年
- 鈴木篤英「漆谷遺跡」福井県埋蔵文化財調査報告第31集 同 2008年
- 鈴木篤英「波寄三宅田遺跡」『年報27 平成23年度』同 2013年
- 月輪泰・柳部正典 編『法土寺遺跡Ⅱ』福井県埋蔵文化財調査報告第63集 同 2003年
- 仁科章「坂井町木部新保出土の仏具 - 資料紹介 -」『福井考古学会会誌 第3号』福井考古学会 1985年
- 仁科章「第八章 第二節 十一 木部新保遺跡」『新修 坂井町誌 通史編』坂井市 2007年
- 沼弘・白崎卓・渡辺貴美「葛蒲谷遺跡群」・「三宅古墳群」『福井市史 資料編1 考古』福井市 1990年
- 福井県教育委員会『福井県遺跡地図』1993年
- 藤原武二「佐野館跡」・「黒丸城(館)跡」『福井市史 資料編1 考古』福井市 1990年

## 第3章 遺構

### 第1節 遺跡の概要 (図版第1・2、第4図)

#### 1 地形と層序

小尉遺跡は、九頭竜川下流域左岸の低平・低湿な三角州平野上に展開する。今回の調査区は遺跡範囲のほぼ中央、小尉町集落の南方および黒丸城町・三宅町集落の北方に広がる水田地帯に位置し、調査前の状況は水田・畑地・農道である。調査区の形状は国道416号バイパス延長線上の一部であるため、直進道路の線形そのままに長方形を呈し、規模は南北長120m、東西幅21m、総面積2,520㎡を測る。遺構検出面の標高は南西から北東へ3.00～2.90m、北西から南東へ3.00～2.90mを測り、全体としては東方向へやや下降する程度で、ほぼ平坦と言ってよい。

今回の調査区では水田耕作土や農道部の盛土の直下に地山層(基盤層)である黄褐色粘質土が露出し、遺物包含層は確認できなかった。したがって、標準層序は以下のようになる。

I層：表土層。水田・畑地の耕作土や農道部の盛土など、開発に伴う造成土で構成される。

II層：地山層。黄褐色粘質土で構成される。

調査区とその周辺域一帯は近年の土地区画整理事業など大規模開発行為によって、遺物包含層のすべてと地山層の一部まで削平を受けており、当時の生活面も失われたものと推測するが、遺構はおおむね良好な遺存状態を保っていた。

#### 2 遺構検出状況

検出した遺構は住居1棟、井戸1基、溝・土坑・ピットである(第4図)。溝・土坑・ピットについては遺物を得たもののみ番号を付し、その総数は溝5条、土坑7基、ピット45基をそれぞれ数える。

遺構の分布状況には明瞭な偏りが認められ、遺構の大半が調査区北半部に集中する。特に調査区を北西-南東方向に横断する溝5(第9図)以北に、主要遺構のすべてが偏在する。

#### 3 遺物出土状況

出土遺物量は大型コンテナで9箱を得た。上記のように遺物包含層をほとんど欠失するため、その大半が遺構出土遺物で、調査面積に比して遺物量は少ない。内容は弥生時代後期の土器が主だが、被熱・劣化したものが大半で、遺存状態は総じて悪い。

土器以外の遺物としては、石器・石製品や玉作り関連遺物がある。後者については、遺構精査時に玉製品や原石資料を検出したため、検出区域の遺構覆土を中心に土壌洗浄を随時実施して、関連遺物の抽出を試みた結果、管玉完成品および未製品や剥片などを若干量得た。

### 第2節 遺構 (図版第2・3、第5～9図)

検出した遺構は住居1棟、井戸1基、溝5条、土坑7基、ピット45基である。本節では主要遺構についてのみに記す。各遺構出土遺物については、第4章を参照されたい。なお、本節で提示する各遺構の規模(長さ・幅・深さ)や方位(角度)などの数値は、すべて遺構検出面を基準として測量図上で算定した概数値である。

## 1 住居

**住居1** (第5・6図) B～D1～3区にかけて検出した。塊状の楕円弧を描く周溝と、その区画内の中央付近に柱穴と見られる大小深浅様々なピット (p4・12・17～22・40～42) が多数集中しており、いわゆる平地住居と判断する。調査時には周溝と認定しなかったが、当時の生活面がある程度削平されていることを考慮すれば、溝2・4および土坑1～4など周辺の遺構も周溝と一連の遺構である可能性が高い。平面形は南北方向にやや長い楕円形を呈し、内部区画の規模は長軸14.2m、短軸13.6m、周溝を含めた全体規模は最大長18.0mを測る。長軸はN31°Wを、入口となる開口部はN87°Wを向く。周溝は幅0.2～2.0m、深さ0.1～0.3mを測る複数の溝が併行あるいは重複しながら連結する。周溝底面の標高は2.77～2.91mを測り、全体に起伏が多く、安定しない。覆土は被熱した土器片や炭・焼土粒を非常に多く含む。区画内の多数のピットは基本的に住居に伴う柱穴群と推測するが、形状・規模・位置関係に共通性や規則性が見出せず、柱穴の配列を特定し得ない。

## 2 井戸

**井戸1** (第7図) E2・3区で検出した。平面形は不整楕円形を呈し、長径1.40m、短径1.36m、深さ0.80mを測る。覆土は土器片や炭を多く含むが、土器の遺存状態は比較的良好で、住居1周溝覆土から出土した土器のように被熱した様子はほとんど見受けられなかった。井戸棒などの内部構造物は検出しなかったが、井戸底部から加工痕を残す木材や表面が一部炭化した木片などを若干得た。

## 3 土坑

**土坑1・3** (第7図) 土坑1はB2・3区で、土坑3はC・D2区でそれぞれ検出した。住居の項で記した通り、いずれも住居1周溝の一部分と推測する。

**土坑6** (第7図) E2区で検出した。平面形は歪楕円形を呈し、長径1.24m、短径0.92m、深さ0.24mを測る。長軸はN33°Wを向く。

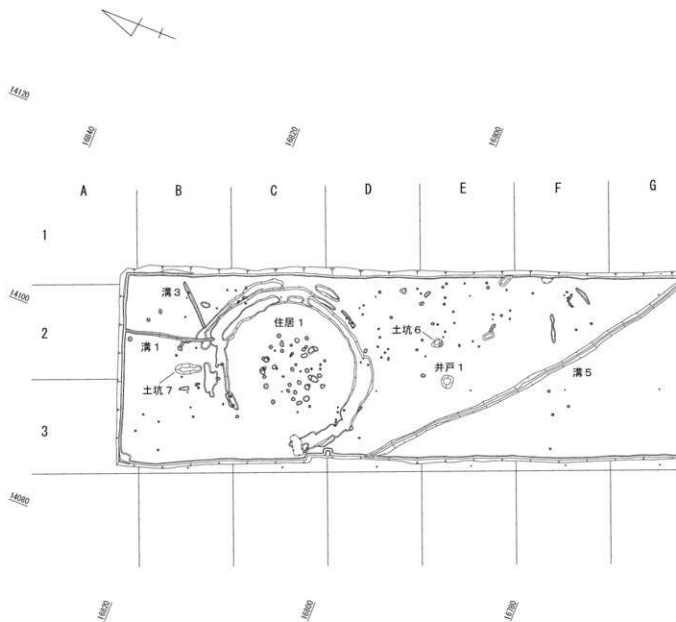
**土坑7** (第7図) B2区で検出した。平面形は長楕円形を呈し、長径2.78m、短径1.08m、深さ0.62mを測る。長軸はN23°Wを向く。

## 4 溝

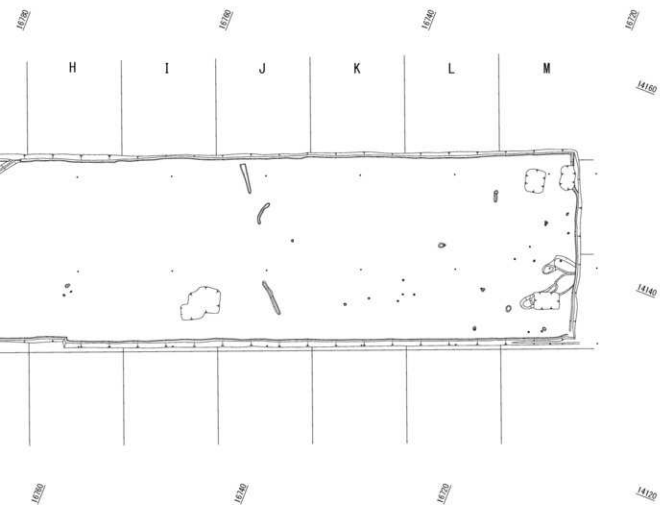
**溝1** (第8図) A・B2区で検出した。住居1周溝・溝4・土坑5と切り合い、土坑5に先行する。規模は幅0.26～0.36m、深さ0.13～0.19m、総延長7.64mを測り、若干屈曲しながらも、ほぼN14°Wを向いて直線的に延伸する。底面の標高は2.83～2.90mを測り、多少の起伏はあるが、全体に北方へ下降する。住居1周溝や溝4との切り合いが確認できない(断面図C-C'、断面D-D')ことから、住居1に付随し、周溝内に溜まった水を排水する溝であったと推測する。

**溝3** (第8図) B1・2区で検出した。溝4に切り合い、これに先行する。規模は幅0.24～0.36m、深さ0.04～0.08m、総延長4.24mを測り、N44°Eを向いて直線的に延伸する。底面の標高は2.93～2.99mを測り、全体に北方へ下降する。

**溝5** (第9図) D～F3区からF・G2区にかけて検出した。規模は幅0.56～0.98m、深さ0.32～0.60m、総延長40.42mを測り、N40°～56°Wの間で若干屈曲しながらも、ほぼ北西～南東方向を向いて直線的に延伸する。底面の標高は2.54～2.67mを測り、全体に南東へ下降する。覆土は被熱した土器片や炭を含み、住居1周溝などの状況と類似するが、その包含量はさほど多くない。前節で記したように、この溝5を境として遺構密度が北方では密に、南方では希薄になるため、集落内の境界となる区画溝と推測する。

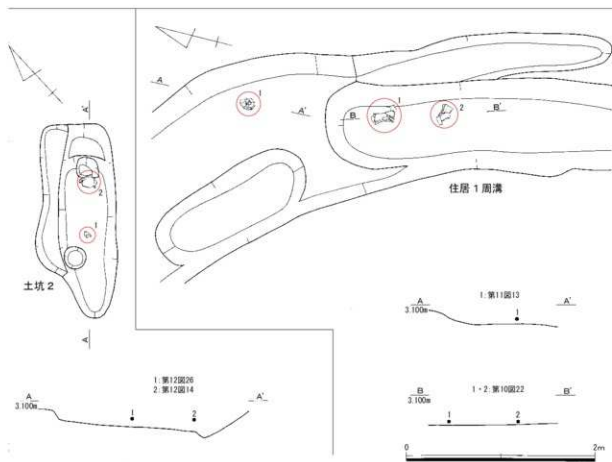
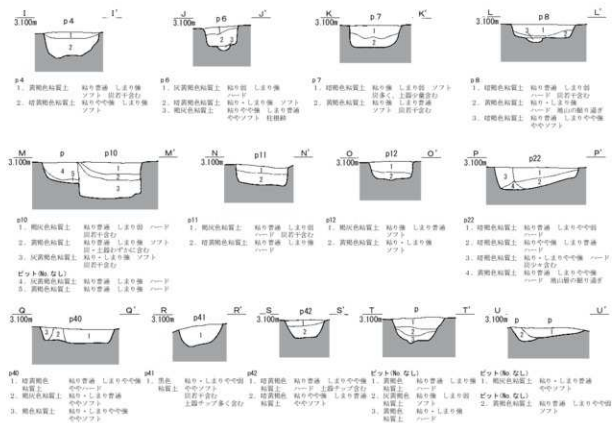


第4図 調査区全体図 (縮尺1/400)

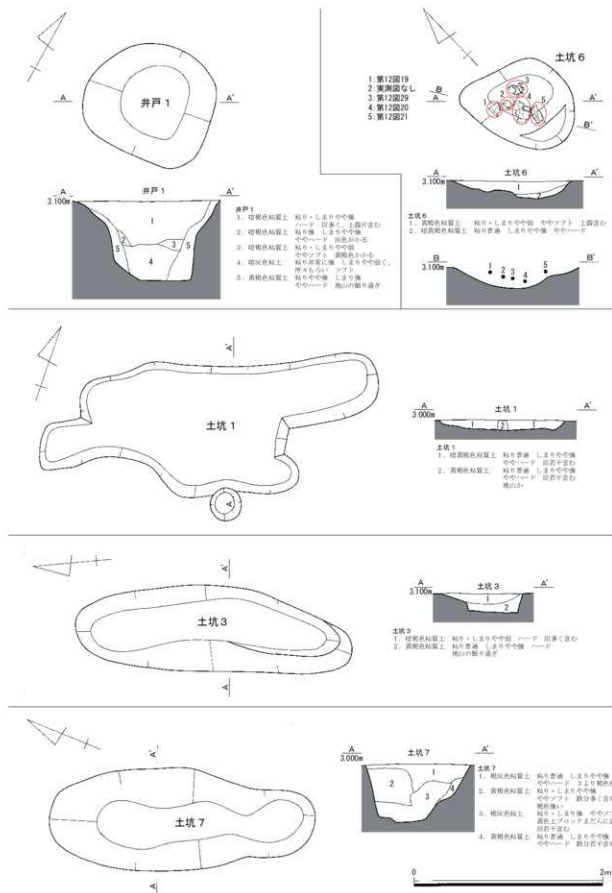




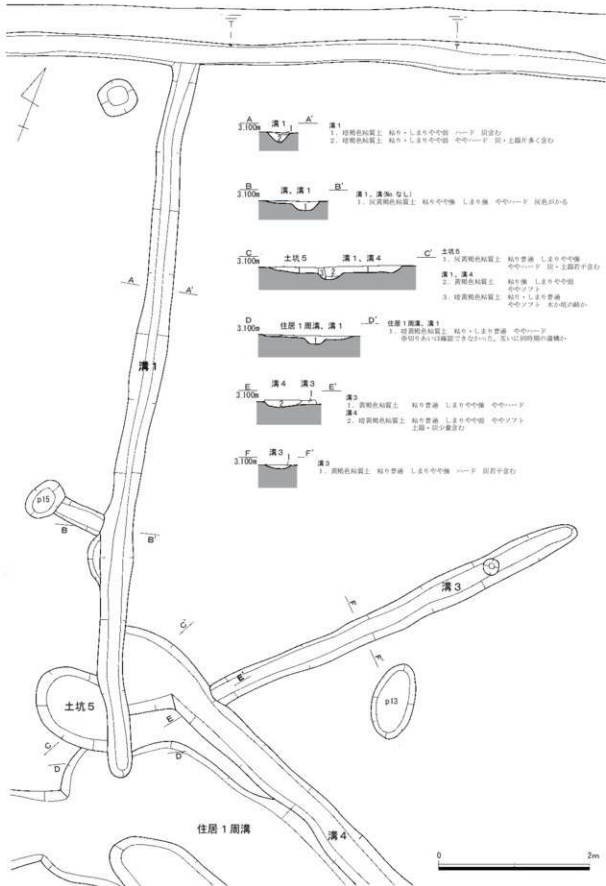




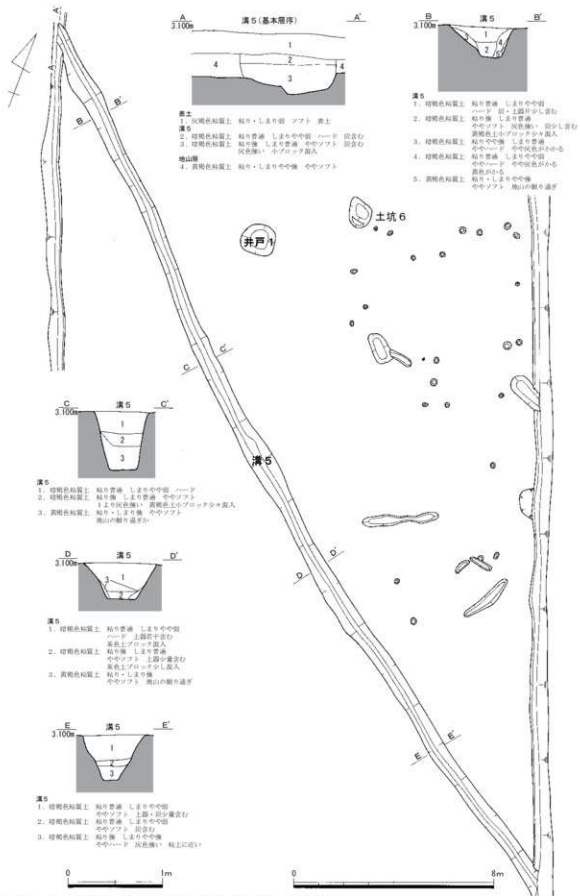
第6図 住居1実測図(2) (縮尺1/40)



第7図 井戸1、土坑1・3・6・7実測図(縮尺1/40)



第8図 溝1・3実測図(縮尺1/50)



第9図 溝5実測図(平面図:縮尺1/150、断面図:縮尺1/40)

## 第4章 遺物

### 第1節 土器 (図版第4・5、第10～14図、第1表)

本遺跡から出土した土器はすべて弥生土器で、その所属時期は弥生時代後期には限定される。器種には甕・壺・鉢・高坏・器台・蓋(「～形土器」についてはすべて省略する)があり、これに小型土器が加わる。壺や鉢には脚台が付くことがあるが、脚台だけで器種が判別できないものは「脚台」と記した。同様に高坏や器台の脚部で接合部を欠くものは「脚部」、底部のみで器種が判別できないものは「底部」とそれぞれ記した。なお、本遺跡の所在する福井県嶺北地域では、弥生時代全体を通観し得る土器編年が未だ十分でないため、本節では研究が進んでいる石川県の編年を用いる。

#### 1 遺構出土土器

##### 1) 住居1周溝

**甕** (第10図1～22・26・27) いわゆる「く」の字口縁甕と、後期で主体となる有段口縁甕に大別できる。前者は中期の「く」の字口縁甕の系譜からつながるもので、磨滅のため明瞭でないが、頸部近くまでの器壁が薄いことから、頸部までの削り上げをおこなっていると判断する。この頸部までの削り上げは、石川県の弥生後期土器形式である猫橋式の指標とされる技法である。

「く」の字口縁甕は中期のそれとは異なり、いずれも口縁に明らかな平坦面を設けるが、5・15・20・27は口縁の器壁と同じく拡張せずに面を設けるだけで、3・14・18・21・22・26は強いヨコナデで僅かに上へ突出し、10・12・17は上下に拡張する。有段口縁甕は2・13・16・19が口縁を上へ僅かに摘み上げ、4・11は明確に摘み上げ、1・6～9はさらに立ち上がり内面に段を設け、7のように胴部上半に刺突列点を施文する。

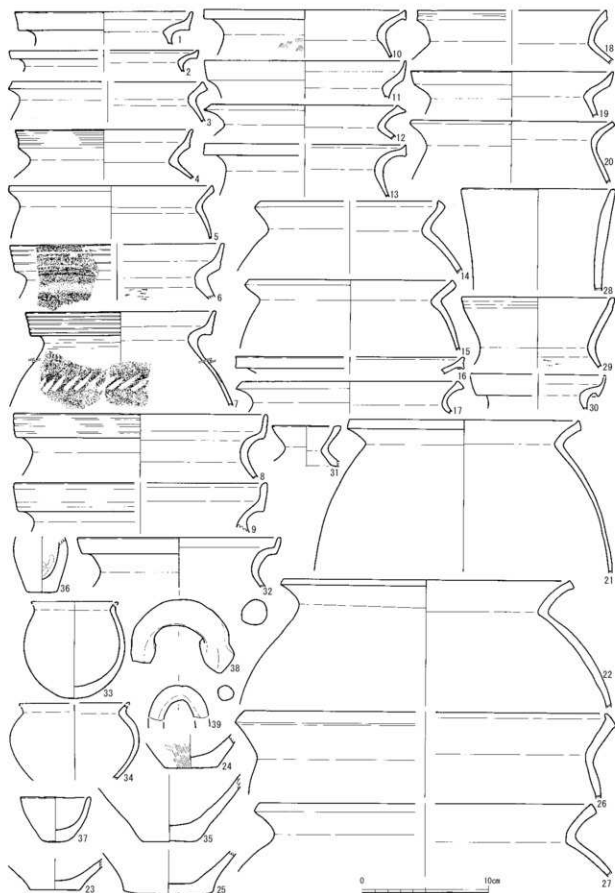
「く」の字口縁甕と有段口縁甕について大きく異なるのは、前者の平坦面が内傾するのに対し、後者のそれが直立する点である。また、後期の「く」の字口縁甕や有段口縁甕は平坦面に擬凹線文を施すものがほとんどだが、本資料の場合、前者が12点中1点(18)、後者でも12点中4点(4・6～8)と極端に少ない。

**壺** (第10図28～32、第11図1・2) 第10図28・29は縦長の胴部から頸部が長く伸びて口縁が開かない長頸壺、同図30・32は無文の有段口縁壺である。第11図1はその特徴的な文様から、後期の山陰から北陸の日本海沿岸に広く分布する台付装飾壺、同図2はその脚台と推定する。第10図31はさらに小さく開く壺の口縁部と考えるが、全体の器形は不明である。

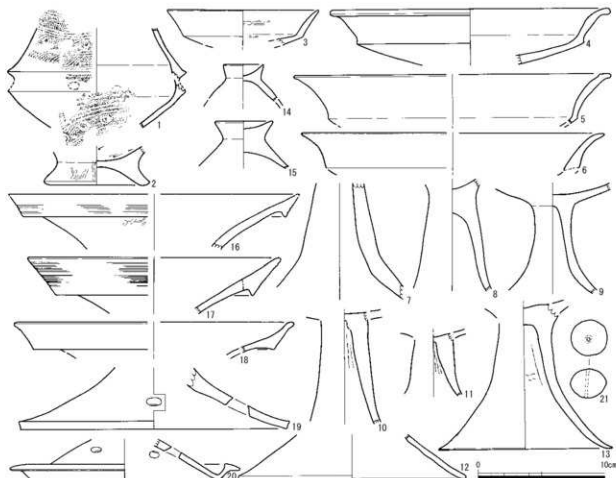
**鉢** (第10図33・34・38・39) 33・34は小型で「く」の字に小さく屈曲する口縁の鉢、38は大型の有段口縁鉢に貼り付く把手である。39は壺の胴部上半に貼り付く小さい把手で、水差と考える。

**高坏・器台** (第11図3～13・16～20) 3～6は坏底部から立ち上がり屈曲して口縁となる高坏で、3・6は開いた口縁がそのまま端部となり、5は端部に面を設け、4はさらに広がってやや反り返った端部となる。この時期の高坏は口径が30cm近い大型品が一般的だが、3は口径が15cmに満たず、壺の口縁である可能性も残る。16～18は器台で、16・17は幅広の口縁帯を下に突出させるもの、18は上に立ち上げるもので、前者には擬凹線を施文する。8～11・13は坏底部との接合部が残存する高坏の脚部で、7・12・19は脚部だが器種は判別できない。20は逆L字状の端部で、棒状脚に付くものであろう。

**蓋** (第11図14・15) 蓋の摘み部である。



第10圖 土器実測図(1) (縮尺1/3)



第11図 土器実測図(2) (縮尺1/3)

その他の土器 (第10図23~25・35~37) 36は小型の壺の胴部、37は小型の鉢である。23~25・35は底部で、壺か壺かは特定できない。

土製品 (第11図21) 土玉である。両側から穿孔しているが、貫通はしていない。

## 2) 井戸 1

壺・鉢 (第12図1・2) 1は擬凹線文がわずかに残る有段口縁甕、2は無文の有段口縁鉢である。

高坏・器台 (第12図3~13) 3・4は壺の可能性もあるが、壺ならば二重口縁の類になるはずで、他の土器と時期が全く合わなくなるため、高坏の坏部と考える。5~8は器台で、5は受部に口縁帯を垂下させるもの、6は上に立ち上げるもの、8はそのいずれかに付くであろう筒部、7は有段の脚端部に擬凹線を施文するものである。9~12は高坏の脚部で、9・10は「ハ」の字に開くもの、11・12は棒状の脚部である。13は鉢などの脚台であろう。

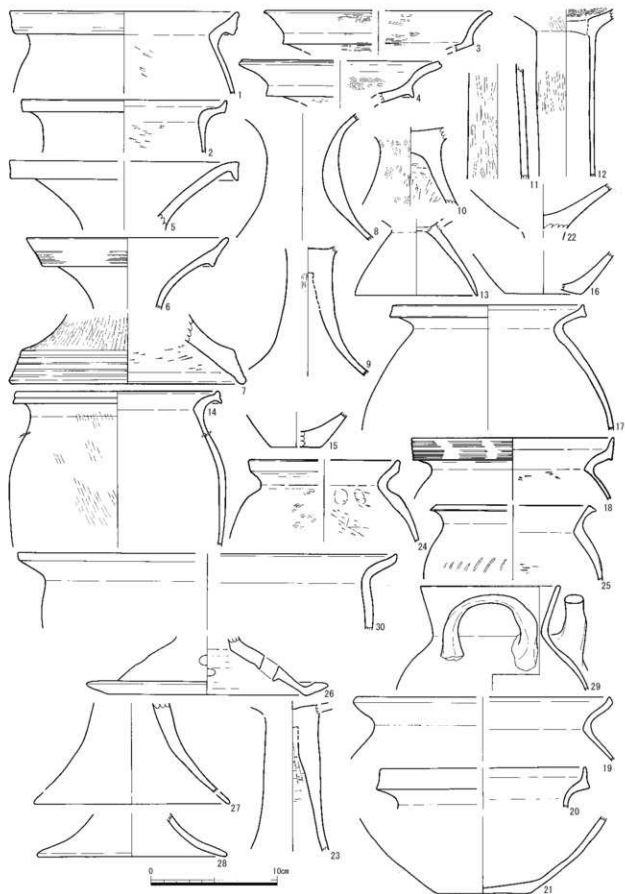
## 3) 土坑 1

壺 (第12図16~18・25) 17・25は「く」の字口縁甕、18は有段口縁甕である。前者には擬凹線を施文しないが、25の肩部には刺突列点を施文する。16は壺か壺の底部である。

高坏 (第12図22) 高坏の坏底部である。

## 4) 土坑 2

壺・鉢 (第12図14・15・24・30) 14・15は有段口縁甕で、14は口縁の平坦面を上下に拡張するもの、24は上に伸びるものである。30は口径の大きい「く」の字口縁鉢、15は壺か壺の底部である。



第12圖 土器実測圖(3) (縮尺1/3)



高坏（第12図26）高坏の脚端部で、逆L字になるものである。

### 5) 土坑3

高坏・器台（第12図23・27・28）23はハの字に開く高坏脚の筒状部分、27・28は脚部下半のハの字に開く部分で、高坏か器台かは特定できない。

### 6) 土坑6

壺・壺（第12図19～21・29）19は「く」の字口縁甕、20は有段口縁甕で、いずれも擬凹線を施文しない無文である。29は肩部に把手が付く壺である。21はおそらく下半から大きく張りそうな胴部を有する壺の底部であろう。

### 7) 溝1

壺・壺（第13図2・3・8・9・14・16・41）3は「く」の字口縁甕、2・8・9は有段口縁甕で、2には擬凹線を施文するが、ほかの3点は無文である。41は壺の肩部につく把手である。14・16は甕か壺いずれかの底部である。

高坏・器台（第13図30・36・38）36は高坏で、外反する口縁端部が膨らむように肥厚する。30は器台で、有段口縁の口縁を上下に拡張し、擬凹線を施紋しない。38は高坏か器台いずれかの脚部である。

蓋（第13図42）頂部を穿孔した蓋の摘み部である。

### 8) 溝2

無文有段口縁1点（第13図5）のみ図示した。器種は甕か鉢と考える。

### 9) 溝3

脚台1点（第13図27）のみ図示した。器種は小型の鉢と考える。

### 10) 溝4

壺・壺（第13図6・7・20）6・7は有段口縁甕で、いずれも無文である。20は小型壺の平底であろう。

高坏（第13図33）坏部が外反する高坏である。

蓋（第13図43）蓋の摘み部である。

### 11) 溝5

壺・壺（第13図1・4・10～13・15・17～19・21～26・28・29）1・4・10・11・21・25は有段口縁甕で、1のみ擬凹線を施文する。22～24・26は頸部が長く伸びる有段口縁壺である。12・13・15・17～19・28・29は甕か壺の底部で、29は立ち上がる端部が小さく横に張り出して、上げ底のようなもの、19は焼成前に穿孔した平底である。

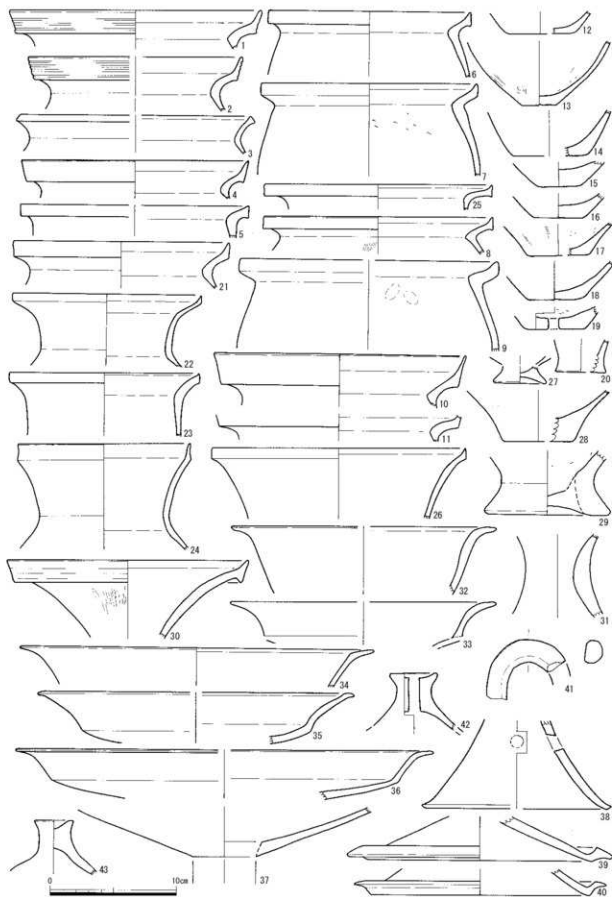
鉢（第13図32）胴部が張らず、頸部が緩く外反する短い口縁の鉢である。

高坏・器台（第13図31・34・35・37・39・40）34・35・37は高坏で、34・35は大きく開いた口縁の端部がさらに水平に伸びるもの、37はその脚との接合部である。39・40は逆L字に外反する脚端部で、棒状脚に付くものであろう。31は器台の受部と脚部をつなぐ筒部の中ほどの部分である。

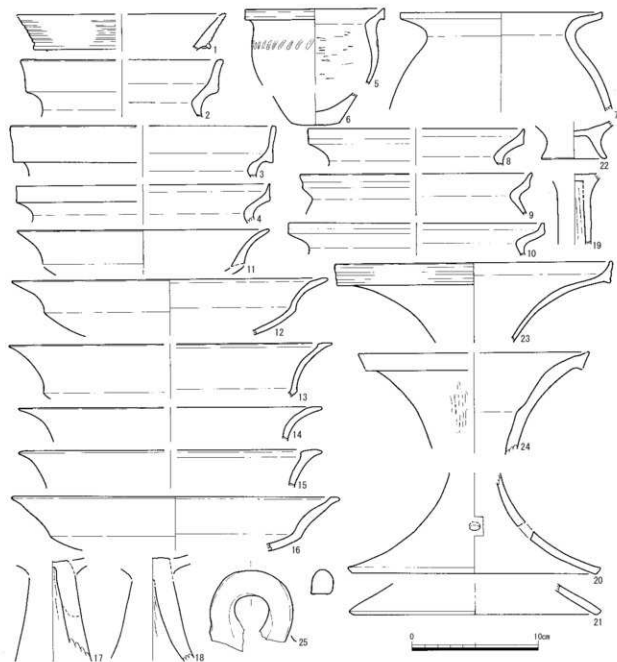
## 2 遺構外出土土器

壺（第14図2～4・7～10）2・3は明確な有段口縁甕、4・8～10は有段でも立ち上がりが小さい近江系とも考えられる。7は頸部が大きく丸く屈曲し、口縁が大きく開く「く」の字口縁甕で、従来見られたものとは大きく異なる。

高坏・器台（第14図1・11～21・23・24）11～16は坏部口縁が外反する高坏で、11のみ口径20cmほどと明らかに小さいが、12～16はこの時期に一般的な口径25cm前後のものである。後者5点には形



第13圖 土器実測圖(4) (縮尺1/3)



第14図 土器実測図(5) (縮尺1/3)

状に違いがあり、12・14は端部内面に平坦面を有し、13・15・16は肥厚する。1・23・24は受部口縁が有段となる器台で、1・23には擬凹線を施文し、24は無文である。1は口径が17cmほど小さく、壺か鉢の口縁の可能性もある。17・18・20は「ハ」の字に開く高坏の脚部である。19は棒状脚だが、これほど小さなものは類がない。21は脚端部のみで高坏か器台かは特定できない。

**鉢** (第14図5・6・25) 5は立ち上りの小さな有段口縁鉢で、口縁は無文だが、胴部上半にヘラの刺突列点を施文する。6は5の底部と考える。25は大型有段口縁鉢の胴部に貼り付く把手である。

**脚台** (第14図22) わずかに外反する短い脚台だが、その上の胴部が不明であり、同様の脚台の類は見当たらない。





## 第2節 石器・石製品・玉作り関連遺物 (図版第6、第15図、第2・3表)

## 1 石器・石製品

本遺跡で出土した石器・石製品は総数10点を数え、うち7点を図示した。石器の器種には打製石斧、磨石類、砥石、石鏃がある。以下、器種別に記述する。

**打製石斧** (第15図1・2) 総数2点を数え、いずれも破損している。1は刃部を欠くが、いわゆる短冊形と推測する。表面に自然面を大きく残し、表面はほぼ単一の剥離面である。側縁部の調整が密で、特に左側縁は剥離面がほぼ潰れているが、頭部調整はさほどでない。2はいわゆる撚形を呈し、基部を欠く。全体に扁平なのは石材の節理によるものと見え、表面の大きな平坦面は剥離面の可能性もある。側縁部の調整は、左側縁が粗いのに対し、右側縁は密で剥離面が潰れて若干摩滅している。

**磨石類** (第15図3) 総数4点を数え、完形品は1点のみである。一般に磨石・凹石・敲石と分類される石器は相互の特徴を併せ持つことが多いため、これらを総称して磨石類とする。

3はいわゆる敲石で、石棒にも似る。両側縁部と端部、特に下端部の敲打痕が顕著で、一部の敲打痕や剥離面には磨耗痕が重複しており、敲石と磨石の機能を併せ持つことが窺れる。全面、特に側面がよく磨耗しているが、これは磨石としての使用によってではなく、整形によるものと推測する。

**砥石** (第15図4・5) 総数2点を数え、いずれも破損している。4は表・裏面と右側面を使用し、表面と右側面に溝状の磨耗痕が残る。出土地は住居1周溝の一部と見られる溝4であり、玉作り関連工具の可能性も指摘できる。5は石材の節理面から各所で剥離しており、表面と右側面のみ使用面を残す。石質から仕上砥と推測する。遺構面精査中の出土品だが、出土地区には住居1があり、4と同様に玉作り関連工具の可能性がある。

**石鏃** (第15図6) 完形品1点のみ出土した。

**不明石製品** (第15図7) 破損しており、全体形状が不明なため、不明石製品とした。磨製品で、明瞭な稜線を持つ断面四角形の作出部から、断面円形の指に似た棒状の作出部が突出する。全面よく磨かれ、全体に精緻な造形である。形状から見ると、縄文時代遺物の独鈷石や御物石器にも似るが、いずれとも細部で異なり、断定はできない。

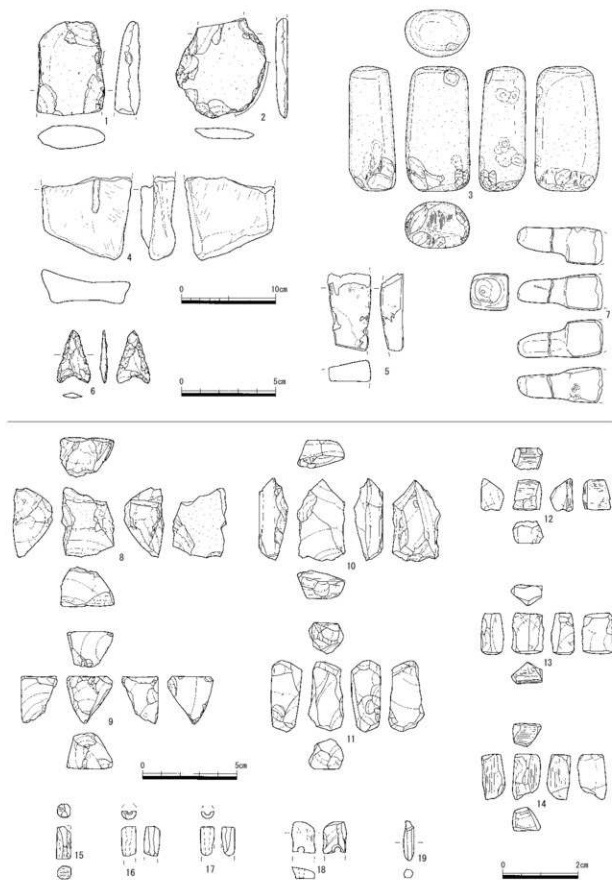
## 2 玉作り関連遺物

本遺跡で出土した玉作り関連遺物は総数19点を数える。内訳は緑色凝灰岩製管玉および未成品が17点、不明品が2点で、うち12点を図示した。大半が住居1周溝と住居区画内中央のビット(p7・20・21・41)出土品である。遺構面精査時の出土品2点も住居1の位置する地区から出土しており、全体として住居出土資料と判断できる。このほか、製作段階で生じたと見られる剥片・チップ類も得た。

**管玉および未成品** (第15図8~17) 管玉の製作過程には、原石・石核段階、荒削段階、形削段階、角柱段階、穿孔段階、仕上げ段階、完成品の各段階があり、本遺跡では形削~穿孔段階および完成品の各資料を得た。内訳は形削段階3点、角柱段階7点、穿孔段階5点、完成品2点である。穿孔段階品および完成品はすべて破損している。

8~10は形削段階の資料である。8は表裏に自然風化面を持つ小さな原石の平坦面からの打撃により、側面を割り取ったもので、状況としては荒削段階に近い。9は三角形状を呈し、側面に直径2mm程度のごくわずかな穿孔痕を残す。10は舟形を呈し、裏面に節理面を残す。

11~14は角柱段階の資料である。11は色調が全体に白濁するが、ごく一部に石材本来の濃緑色が見えることから、被熱による影響と推測する。12・13は施溝痕を残し、部分的に研磨を施す。14は全体



第15図 石器・石製品・玉作り関連遺物実測図（1～5・7：縮尺1/4、6・8～10：縮尺1/2、11～19：縮尺1/1）

の半分程度まで研磨を施すが、下部を欠損した可能性がある。

15は穿孔段階の資料である。八角柱に研磨整形するが、穴が外側へ極端に反れており、不自然である。両端部にわずかながら穿孔準備のいわゆる「あたり」の痕跡を残すことから、一度穿孔に失敗したものを穿孔直前まで再度仕上げ直した可能性もある。上端の一部を欠くのも、あるいはその「あたり」を付ける際の衝突によって破損したのかも知れない。

16・17は管玉の完成品である。16は縦半分に割れたもので、上端の一部と下端部を欠く。両面穿孔で、穴の先端は両方いずれも先細る。17は上端から斜めに割れたもので、穴の先端は先細る。

**不明品** (第15図18・19) 18は扁平な剥片に穿孔したもので、穴の下半部以下を欠く。表面と上端面を研磨するが、その他の面は剥離痕を残す。両面穿孔だが穴の角度にほとんど差異はなく、片面穿孔後、裏面から仕上げ加工した可能性もある。管玉の製作過程で生じた剥片を一部研磨後、穿孔したものと考えるが、種類はもとより未成品か完成品かも判別できないので不明品とした。19は六角柱の細い棒状を呈し、穿孔具の可能性はあるが、両端部を欠損したのか、ともに回転痕が観察できないので、これも不明品とした。

## 参考文献

富山正明「第5章 第3節 玉作り関連遺物」[中角遺跡4 - II・III区下層編-] 福井県埋蔵文化財調査報告第117集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011年

第2表 石器・石製品計測表

(単位mm)

種別No.	地区	遺構・層位	器種	遺存状態	最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)	石材	備考
15-1	D2	住1周溝	打製石斧	刃部欠	100.10	71.75	25.80	250.60	輝石安山岩	
15-2	-	表土剥ぎ	打製石斧	基部欠	104.00	95.00	13.15	154.30	安山岩	
-	C2	住1周溝	磨石類	破損	99.70	87.25	49.10	520.60	安山岩	
-	B3	p2	磨石類	破損	62.60	60.65	36.50	163.60	安山岩	凹穴表面両面各1箇所
-	B2	遺構面精査	磨石類	破損	77.85	98.25	55.70	529.40	安山岩	凹穴表面両面各1箇所
15-3	B2	遺構面精査	磨石類	完形	131.35	67.55	50.00	825.50	安山岩	
15-4	C2	溝4	砥石	破損	89.00	95.00	36.00	273.50	砂岩	
15-5	B2	遺構面精査	砥石	破損	82.00	46.00	24.00	106.60	凝灰岩	
15-6	G3	遺構面精査	石鏝	完形	27.95	17.45	3.05	1.01	熊野安山岩	
15-7	C2	遺構面精査	不明	破損	8.90	3.80	4.00	159.80	熊野砂岩	出土後、二つに破損

第3表 玉作り関連遺物計測表

(単位mm)

種別No.	地区	遺構	種類	段階	最大長	最大幅	最大厚	孔外径	孔内径	重さ(g)	色調	備考
15-8	D2	住1周溝	未成品	形削段階	37.25	28.45	20.90	-	-	22.04	白～淡緑色	
15-9	C2	p21	未成品	形削段階	25.20	23.95	18.70	2.00	-	10.61	濃緑色	側面に穿孔痕
15-10	B2	遺構面精査	未成品	形削段階	43.45	25.40	15.25	-	-	16.88	淡緑色	
15-12	D2	住1周溝	未成品	角柱段階	7.90	7.90	6.40	-	-	0.44	淡緑色	抽溝痕残、分割片
-	D2	住1周溝	未成品	角柱段階	3.25	3.15	2.30	-	-	0.03	緑灰色	微細片
-	D2	住1周溝	未成品	角柱段階	3.30	4.40	3.05	-	-	0.06	緑灰色	微細片、穿孔の「あたり」痕を残す
15-13	D3	住1周溝	未成品	角柱段階	10.85	8.40	5.20	-	-	0.49	白緑色	抽溝痕残、分割片
-	D3	住1周溝	未成品	角柱段階	3.50	3.75	3.05	-	-	0.04	緑灰色	微細片
15-11	C3	p7	未成品	角柱段階	18.30	9.10	7.95	-	-	1.44	白緑色	
15-14	C2	p20	未成品	角柱段階	11.85	7.55	5.70	-	-	0.61	白緑色	
-	C3	住1周溝	未成品	穿孔段階	6.90	4.35	2.60	-	-	0.06	淡緑色	破片
-	D2	住1周溝	未成品	穿孔段階	4.45	3.95	1.50	-	-	0.01	青緑色	微細片
-	D3	住1周溝	未成品	穿孔段階	5.30	3.75	1.95	-	-	0.04	白緑色	微細片
15-15	D3	住1周溝	未成品	穿孔段階	8.45	3.55	3.60	-	-	0.18	緑灰色	孔が透れている?
-	C3	遺構面精査	未成品	穿孔段階	10.50	4.60	2.40	-	-	0.08	白緑色	手載、両面穿孔未貫通
15-16	D3	住1周溝	管玉	完成品	(7.95)	3.80	-	2.00	1.00	0.07	淡緑色	手載、両面穿孔
15-17	C2	p41	管玉	完成品	(7.15)	3.35	-	1.00	1.00	0.05	淡緑色	
15-18	C2	p41	不明品	不明	(8.25)	5.85	3.30	1.50	1.00	0.13	青緑色	勾玉に似るが不明
15-19	C・D3	住1周溝	不明品	-	1.04	0.26	-	-	-	0.08	白色(石英)	先端欠。回転痕なし



## 第5章 まとめ

### 1 遺構

**平地住居** 平地住居に区画溝が近接する状況から、調査区は集落居住域の端部に相当すると考える。調査区内が遺物包含層のすべてと地山層の一部まで削平されていたためか、住居の床面や炉跡などは検出できなかったが、周溝覆土が被熱・炭化した土器片や炭・焼土粒を多量に含むのは、住居が火災に遭った状況を強く示唆するものとする。この火災の痕跡は住居のみならず、周辺の土坑・ピットや井戸、区画溝にまで同様に認められ、相応に規模の大きな火災であったことがうかがえる。

住居内の柱穴に規則的な配列を見出せないのは、北陸地方における弥生時代平地住居の特徴でもあるが、検出基数の多さから見て、改築を繰り返した可能性が高い。周溝が大小複数不定形の溝などで構成されるのも、住居の改築に伴い、周溝を掘り直したためであろう。

### 2 遺物

**石製品** 出土遺物の主体時期は土器と同様に弥生時代後期と判断し得るが、不明石製品（第15図7）については、独鈷石や御物石器に形状が似る点や、本遺跡に近隣する波寄三宅田遺跡（第3図3）で縄文時代後・晩期に属する遺物が多量に出土している点を考慮して、縄文時代遺物の可能性に留意しておく。その場合、本資料は周辺地から流入したものと見るべきであろう。

**玉作り関連遺物** 住居を中心に集中出土したが、前項で記したように住居が床面まで削平されたとすれば、出土資料は全体のごく一部を垣間見せるものでしかない。それゆえに、形削段階以降完成品までの各製作過程資料を一貫して確認できたのは幸運であった。工具類は確認できなかったが、施溝痕を残す未成品資料から施溝分割技法を用いていたことも判明した。施溝分割は弥生時代中期以来の技法で、古墳時代までには鉄工具による打割へ移行したとされ、出土遺物の主体時期とも符合する。

玉作りは県内の弥生時代集落では普遍的に営まれた生業活動であり、当時の集落でも玉作りが盛行していた蓋然性は非常に高いと考える。

### 3 遺跡

今回の調査では大規模な平地住居や井戸など生活関連遺構を主に検出した。近年の土地開発にもかかわらず、遺構がおおむね良好に遺存していたのは、一帯が広大な平坦地形で、削平も微高地の修正程度で収束したためと考える。さらに、出土土器の所属時期が弥生時代後期にほぼ限定でき、遺構の先後関係がほとんど確認できないことから、小尉遺跡は弥生時代後期に限って盛行した集落跡と判断し得る。

小尉遺跡の展開する九頭竜川左岸の低平・低湿な三角州平野は、水害の危険性が高い地勢で、安定した居住環境とは言い難い。そうした土地にさえも当時の人々が積極的に進出を果たした要因は残念ながら不明である。ただし、廃絶の要因については、主要遺構の大半に火災の痕跡が強く残る事実から、集落全体が火災に遭い、そのために再建を断念・放棄した可能性を指摘しておきたい。

今回の成果は、弥生時代後期の小尉遺跡周辺において、生活に不利な土地環境に対しても人間の活発な生業活動が強く影響を及ぼしていた実態をうかがわせるものである。その意味で、小尉遺跡と同様の地勢にあって、縄文、弥生・古墳、奈良・平安時代の各時代集落が展開した波寄三宅田遺跡の実態についても、今回の成果と相互に対照し、関連し得るものとして注目すべきであろう。

# 写 真 图 版



(1) 調査区遠景 (北西より)



(2) 調査区遠景 (南西より)



(1) 調査区全景 (北西より)



(2) 住居1、溝1・3 (西より)



(1) 溝5 (南東より)

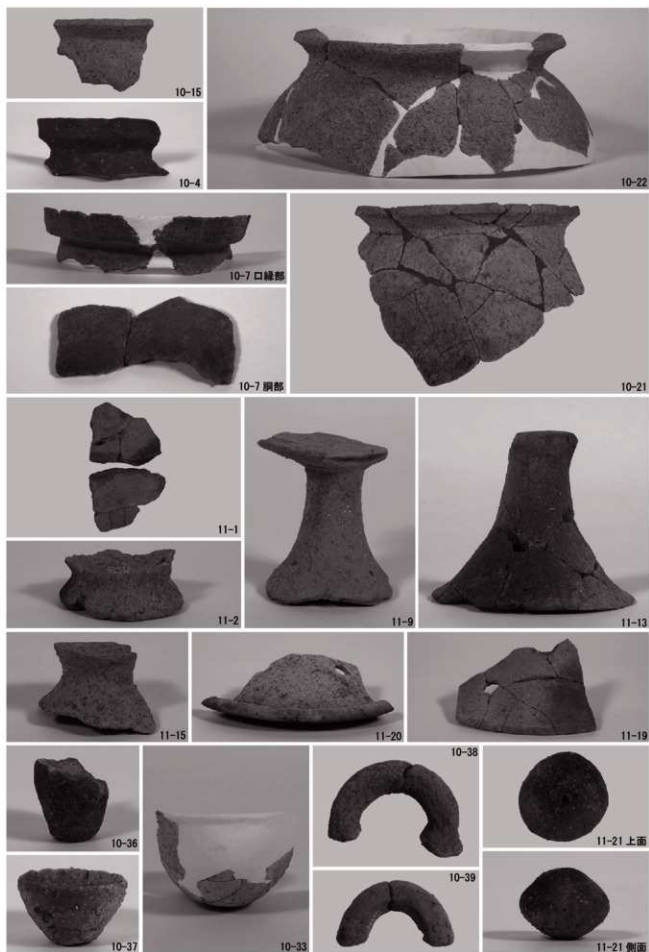


(2) 井戸1 (北より)

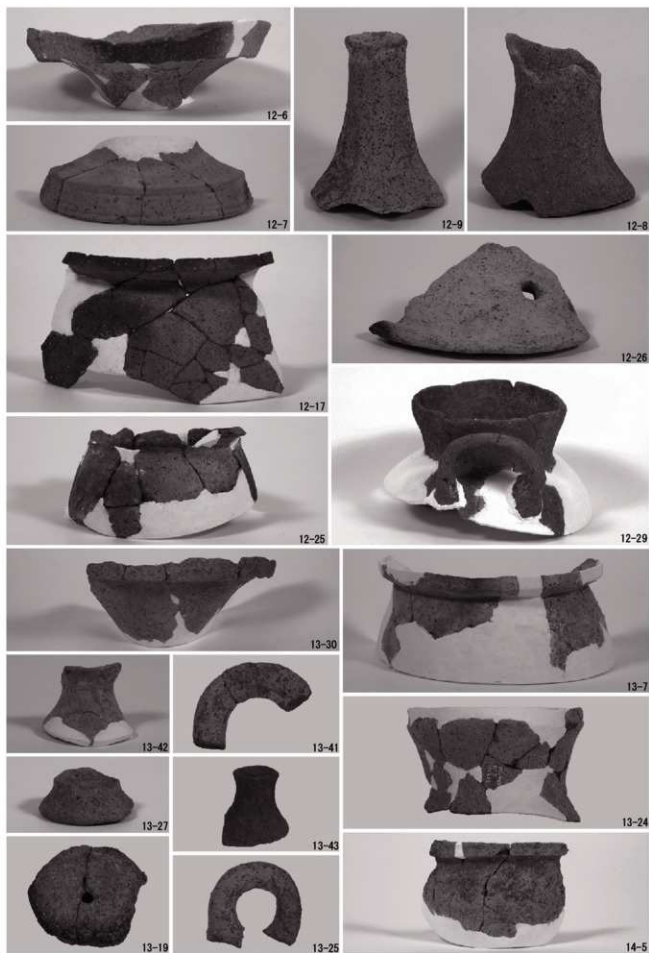


(3) 土坑7 (北より)

図版第四 遺物(土器)

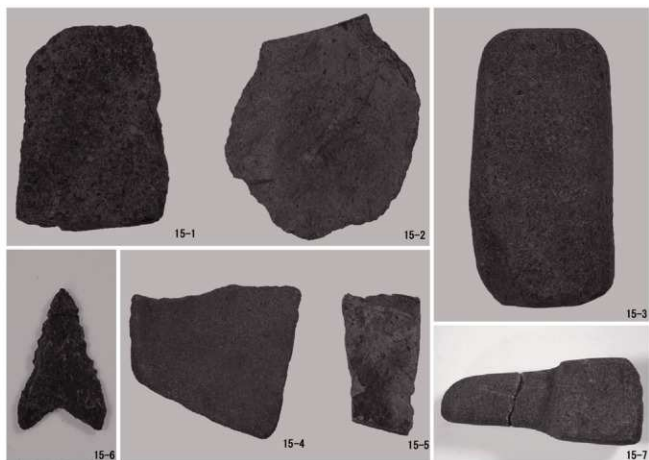


住居1出土土器

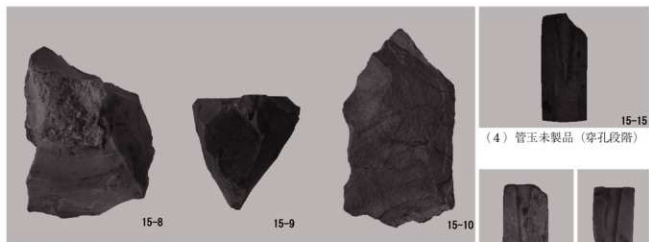


井戸1、土坑1・2・6、溝1・4・5、遺構外出土土器

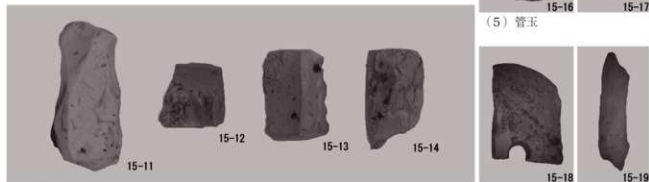
図版第六 遺物（石器・石製品・玉作り関連遺物）



(1) 石器・石製品



(2) 管玉未製品（形割段階）



(4) 管玉未製品（穿孔段階）

(5) 管玉

(3) 管玉未製品（角柱段階）

(6) 不明品



報告書抄録

ふりがな	こじょういせき							
書名	小尉遺跡							
副書名	一般国道416号（白方～布施田バイパス）道路改良工事に伴う調査							
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第159集							
編著者名	中森敏晴 赤澤徳明							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL 0776-41-3644							
発行年月日	西暦2016年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こじょういせき 小尉遺跡	ふくいけん 福井県 ふくいし 福井市 くろまるじょうちやう 黒丸城町	18201	01051	36° 09' 5.4"	136° 09' 24.4"	20120501 ～ 20120831	2,520㎡	記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小尉遺跡	集落	弥生後期	平地住居 井戸 区画溝 土坑・ピット	弥生土器 石器類 石製品 玉作り関連遺物		主要遺構の覆土に焼土・炭が混じり、出土土器の大半が被熱・炭化していることから、集落が火災に遭ったと推測する。		
要約	<p>今回の調査では大規模な平地住居や井戸など生活関連遺構を主に検出し、集落に伴う区画溝が平地住居に近接する状況から、調査区は集落居住域の端部に相当すると考える。</p> <p>出土土器が弥生後期の土器にはほぼ限定され、遺構の先後関係もほとんど確認できないため、本遺跡は弥生時代後期に限って盛行・廃絶したと判断する。なお、集落の廃絶については、主要遺構の覆土に焼土・炭や被熱・炭化した土器片など、火災の痕跡が認められることから、集落が火災に遭って、そのまま放棄された可能性を指摘できる。</p> <p>本遺跡一帯は低平・低湿で九頭竜川に近接するなど、水害の危険性が高い地勢であるが、こうした土地にも集落が積極的に進出し、活発な生業活動を営んでいた事実がうかがえる。</p>							

---

福井県埋蔵文化財調査報告 第159集

## 小 尉 遺 跡

— 一般国道416号(白方～布施田バイパス)  
道路改良工事に伴う調査 —

平成28年3月10日 印刷

平成28年3月22日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター  
〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10  
印刷 白崎印刷株式会社  
〒910-0843 福井県福井市西開発3-715

---